



自然観察

No.120
2016.12月

目 次

・2016年度全道研修会開催される	2
・フォトミニギャラリー	4
・連載「豊平川の野生サケ」③	5
・会費の早期納入についてお願い	7
・連載 面白く楽しい自然ガイド(6)	8
・フィールドニュース	9
・ウォッチングレポート	11
・参加者の声	14
・事務局便り・連絡先	16



残り少ない木の実を食べ、冬を生き抜くヒヨドリ 野幌森林公園 11月

2016 年度全道研修会開催される

～晩秋と初冬の道南の森と湖沼を見る～

2016 年度の全道研修会が道南後志管内の黒松内、共和、及び倶知安の 3 町で 11 人が参加して 10 月 22～23 日にかけて行われました。晩秋から初冬にかけて足早に季節が変わりつつある中、第 1 日目は黒松内町にある北限の歌オブナ林を、2 日目は共和町のチセヌプリ溶岩台地にある神仙沼と倶知安町の羊蹄山のふもとにある半月湖をそれぞれ観察しました。

研修会には、札幌を中心に遠くは帯広市、幌延町からも会員らが参加しました。

黄金色に染まるブナ林の中で、森の様々な営みを観察

北限のブナ林としてよく知られる黒松内町歌オにあるブナ林。最初に今回、現地案内を依頼していた黒松内町ブナセンターを訪問し、研修会開催の趣旨を伝えるとともに、現地案内と解説をお願いして 13 時に現地に向けて出発。あいにくの小雨が降りだしてきましたが、歌オブナ林駐車場公園に集合し、斉藤 均、立田栞那の両解説員から歌オ地区のブナ林が国の天然記念物に指定されるまでの経過などについて説明を受けました。

この後、早速ブナ林に入ってまず最初に観察したのが、動物、鳥たちによって散布されたミズナラ、ブナ、ハウノキなどの実から生えた幼木の様子。とくにブナセンターから子供たちに継続観察をして欲しいという狙いで、ブナの幼木の側に自分の名札を置いてその成長を観察させるという取り組みを行っていることが報告されました。



奥に進むにつれて、大きなブナの木も見られるようになってきましたが、参加者からブナの木には、地衣類の付着がしばしば見られるので、ブナ同定の要件として地衣類の付着は欠かせないのかという質問が出されました。これに対して斉藤解説員から「ブナに見られる地衣類は、ブナ特有なものでは無く他の樹木にも見られるゆえ、同定の根拠にはならない」という指摘を受けました。合わせて、その地衣類をデジカメでクローズアップしたものを撮影して、その模様の中に文字のような形が見られることを示してくれ、参加者たちもこぞって撮影していました。

今年のブナの実のなりは、昨年と比べて著しく不作で、このためそれを当てにしている動物たちにとっては打撃を与えるものの、他方ではもう一つの動物たちの貴重な餌になるミズナラの実であるドングリは豊作で、ブナの不作をミズナラの豊作でカバーされているという自然の微妙なバランスについても説明されました。

ブナ林にはブナはもちろんのこと、その他カエデ類、ミズナラ、シラカバなどの色々な広葉樹も見られました。紅葉は赤色こそほとんど無いものの、ハウチワカエデ、シラカバなどを主にどの樹木も黄色一色に染められていました。

途中、ミズナラの大木が倒れたところでは、残った木の根にホコリタケが生えたりして土に分解していく様子が見られました。さらに大木が倒れてできた空間・ギャップには、ブナをはじめ、カエデ類などの次世代の幼樹が伸び始めてきていて次世代への更新が進んできているところも観察できました。

ギンリョウソウが群生している坂の所では、ベニタケ類と共生関係にあるブナに寄生するというギンリョウソウの生態を引き合いに、植物と樹木の間にある共生・寄生関係についても説明を受け



ました。

雨の勢いが増して、本降りとなり遊歩道も滑りやすくなったため、終点まで行かず途中で引き返し、観察会は終了しました。

この後、宿泊先となっている岩内町の温泉宿である『おかえりなさい』に到着し、直ちに温泉に浸かって、冷えた体を温めて夕食に臨みました。

夕食後は、懇親会も兼ねた研修ということで、今回の研修で研修先の選定、連絡等で大変、お世話になった蘭越町の本協議会会員の大表 章二さんから長年、蘭越をはじめニセコ、倶知安地区で調査撮影された貴重な植物写真をプロジェクターで映しながらの自然解説が行われました。

うっすらと雪化粧し静かに佇んでいた神仙沼

2 日目は夜中に降っていた雨が雪に変わり、視察先の標高 800m 弱ある神仙沼は薄く雪化粧に覆われていました。



ニセコ山系の湖沼の中で一番、人気があると言われる同沼には、民間旅行会社の自然探索ツアーが設けられているだけあって、この日もそれと思しき人々が見られました。とくにその中で驚いたことは、台湾、中国らしき東南アジアの観光客が軽装で来ていたことです。圧雪状態になった坂道の木道の所では、足を滑らせて転ぶ人も見られました。

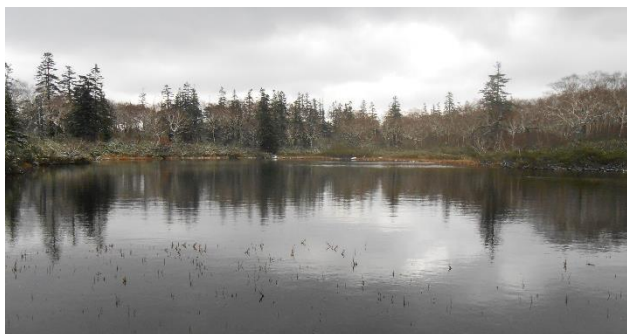
沼に行く途中の木道の両脇には、大きなチシマザサが木道に覆いかぶさるようにビッシリ生えていました。また日本海からの冬の季節風と豪雪のため、ダケカンバの枝がまっすぐ伸びれず大きく曲がりくねったものも散見されるなど厳しい自然条件に耐えている植物、樹木の様子が見られました。

足元に気を付けながら、30 分程度歩くと目的地の神仙沼に到着。小さな池がたくさん見られる池塘区域に入りましたが、晩秋を越えて初冬状態になっているため、咲いている花はもちろんありませんでした。その他の湿地植物もすっかり枯れてキツネ色の褐色に染まり、それなりの美しさを醸し出していましたが、同時に侘しさも漂わせていました。そうした中で目を引いたのは、緑色の生き生きとしたハイマツがあちこちに散見されたことでした。

1000m 以上の高山にしか生えないと言われるハイマツがこの地にあるということは、この湿原自体が高層湿原で、それだけ気候風土が厳しいということを示している証拠だと思われました。

緩やかな流れの所では、清らかな池とか川にしか棲息しないと言われる貴重な紅藻類のカワモズクが漂っていて参加者、一同、熱心に見入っていました。

注目の神仙沼は、紅葉も終わり、鉛色の空をバックに静かに佇んで厳かな雰囲気を見せていました。同沼の名物の一つである浮島も何処かの岸辺に接岸しているのか、浮遊しておらず何処にあるのかすらわかりませんでした。冬空をバックに鏡のような滑らか水面、所々に佇む緑色のアカエゾマツ。風もあって寒い状態ではありましたが、この時期ならではの景色として大変、風情がありました。



樹林の合間に見え隠れする半月湖

最後の視察先となったのは、倶知安町の羊蹄山麓にある半月湖。今から 1 万年前の頃に爆発した時にできた火口湖で、三日月型の半月になったのは、その時出来た溶岩円頂のためだそうです。

ここは針葉樹と落葉樹が混じる混交林の森林地帯となっています。訪れたときはハウチワカエデを中心としたカエデ類、シラカバ等のカバ類などの紅葉が真最中でしたが、ここでも赤はほとんどなく、黄色一色でそれはそれで大変、美しいものでした。

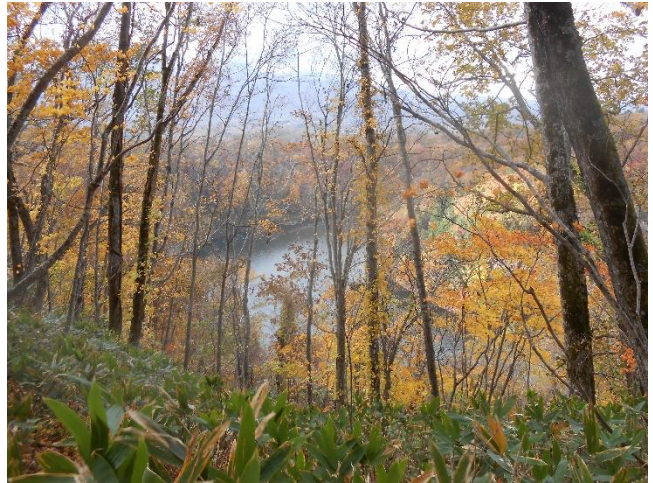
とくにハウチワカエデが群生しているところでは、朱色に葉が染まっていく順序が、葉先から点状に出てくるものとか、葉全体に斑点状態で出てくるものとかというように、それぞれの木によって違うことを確認することができました。

湖は遊歩道から100mほど下った所にあるのですが、とにかく木々に覆われて、その全貌を見ることはできず、樹林の合間からチラチラ見えるというものでした。

しかし、素顔の一部しか見えないことが、かえってその神秘性を醸し出してもいました。

湖面の所までは、100mほどの傾斜の道を下らなければならないということでしたが、高齢者が多いという参加者たちの年齢、体力を考慮した結果(?!)、残念ながら見に行くことを断念しました。

一行はカルデラに当たる周囲を散策できる2kmほどの遊歩道を歩きましたが、途中で目立ったのが、先の台風で倒れたと思われる大木が数カ所見られたことでした。



とくに最初に見た大木は、ミズナラの木に他の木が合体して成長したという珍しい大木の倒れで

一同、思わず見入っていました。またその他の所では根こそぎ倒れて根元が大きくえぐられて大穴が空いていたり、また鋭く尖った折れ口を何本か立てた真新しいかつ痛々しい姿の倒木を目の当たりにして、改めて厳しい自然のもとに生きるこれら樹木たちの現実を認識することができました。




いずれにしても、火口湖というのは、一般的に山頂にできているものが多いのですが(事実、この羊蹄山にも水こそ十分、無いようですが、山頂にも火口湖が見られます。)、ここでは山腹それも標高300mほどの場所に火口湖が見られるという意外性、特殊性が魅力になっていると思われます。

以上、今回の研修先となつた3カ所の状況について報告いたしました。晩秋から初冬にかけての自然の移り変わりを一瞬でしたが、楽しみながら観察できたことと、参加人数の少なさを小回りの利いた行動と参加者同士の深い交流でカバーすることができて意義深い研修会となりました。

(村元 健治)

オジロワシは羽を広げると約2mにもなる大型鳥類。各個体間が一定の距離を保ちながら悠然と旋回したり、急旋回してダイナミックに飛翔したり、足で獲物を捕らえるところなどは迫力満点だ。

(写真・文 山口絃司)



「フォトミニギャラリー」オジロワシ

連載『豊平川の野生サケ』

③豊平川におけるサケ遡上数の推移と産卵域について

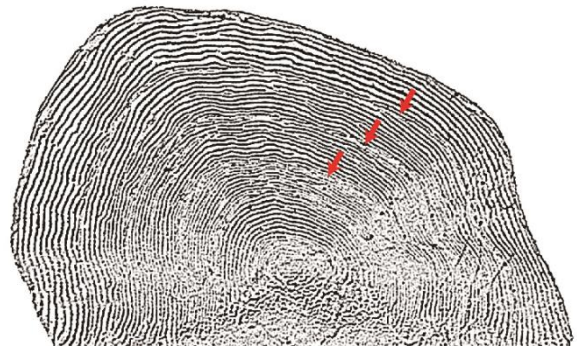
佐々木 北斗(札幌市豊平川さけ科学館学芸員)

カムバックサーモン運動を機に、豊平川には毎秋約 1,000～2,000 尾のサケたちが遡上するようになりました。さけ科学館では、毎年 9 月下旬から翌年の 1 月上旬にかけて、豊平川や札幌市内他河川におけるサケの産卵床調査を行っています。連載 3 回目の今回は、今まで蓄積してきたデータを基に、『豊平川におけるサケの遡上数の推移と産卵域の変遷』についてご紹介します。

1. はじめに～サケの寿命は何歳？～

よく聞かれる質問です。まず、サケの寿命は「〇歳！」と言い切ることはできません。母川に帰ってきて産卵行動をした年が寿命となりますが、回帰年齢は個体によって異なるからです。豊平川において、さけ科学館が今までに捕獲した全個体(死亡個体含む)の年齢組成は、満 3 歳(約 60%)が一番多く、満 2 歳(約 21%)、満 4 歳(約 17%)となっています。

ところでサケの年齢は、どこを見ると分かるのかご存じですか？それは鱗です。耳石(じせき)でも識別可能ですが、鱗の方が簡単です。【図 1】をご覧ください。鱗には隆起線と呼ばれる木の年輪のような模様が 1 年に何本も現れます。夏の間はエサが豊富にあるため、成長度に伴いその線の幅は広がりますが、冬になるとエサの減少とともに幅が狭くなります。隆起線の間隔が狭いところ(図 1 の赤矢印の箇所)は「冬期帯」と呼ばれています。その冬期帯を数えることで、何冬を乗り越えたサケなのかが分かるのです。



【図 1】満 3 歳のサケの鱗

2. サケ遡上数の推移～豊平川にはどれだけのサケが帰ってきているの？～

1990 年以降の豊平川における産卵床数推移を【図 2】にまとめました。さけ科学館では、今までの調査結果から、推定遡上数を産卵床数の 2 倍の数としています(連載『豊平川の野生サケ』②参照)。例えば、500 か所の産卵床を確認できた年の推定遡上数は約 1,000 尾となります。2015 度は 824 か所の産卵床を確認しましたので、推定遡上数は約 1,650 尾となり、過去 25 年の中央値よりも多い結果となりました。

ちなみに、稚魚全体数のうち親ザケとなって母川の沿岸までたどり着けるのは、北海道の場合で約 3～5%。その多くが定置網によって捕獲され、実際に川を遡上できるのはもとの稚魚数の約 0.1～0.5%です。たくさん遡上してきているように見えますが、実はそのサケたちは、その厳しい競争や試練を生き抜いて遡上してきたエリートたちなのです。

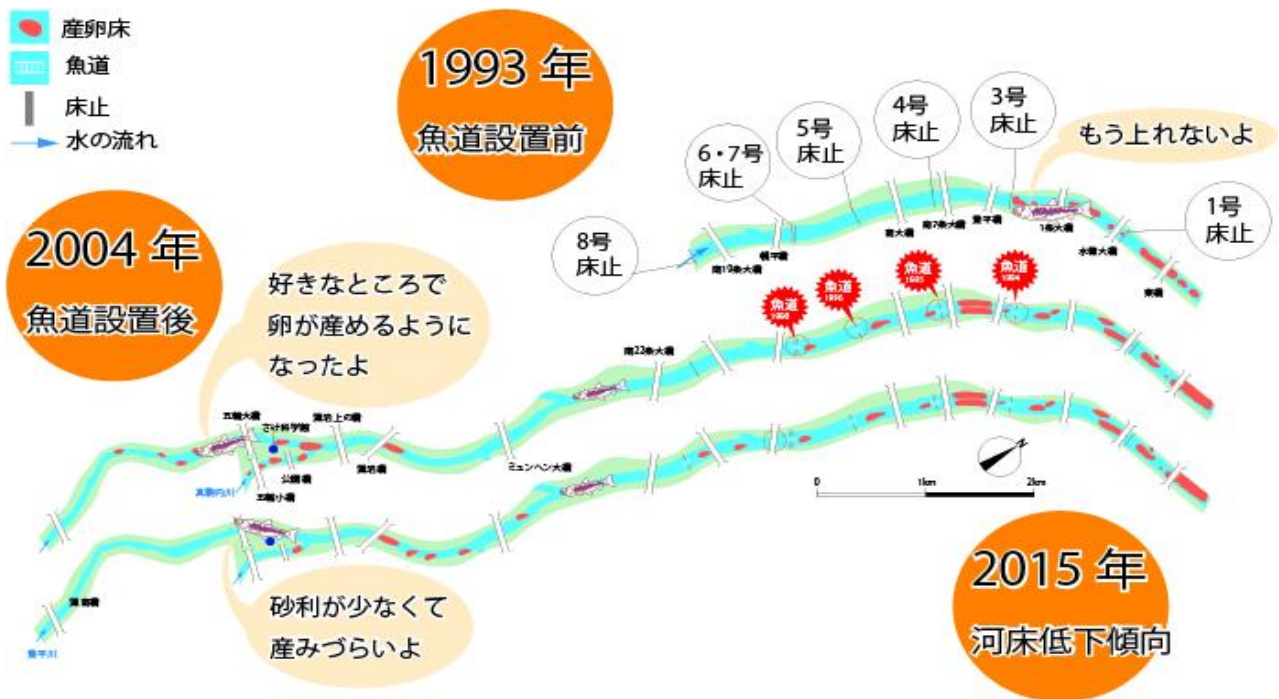


【図 2】産卵床数推移

3. 豊平川の産卵環境～産卵域って変わるものなの？～

【連載『豊平川の野生サケ』②】で、サケの産卵条件（湧水や伏流水、適度な大きさの石が必要であること）や、豊平川における産卵域の拡大【床止工（とこどめこう）（川の勾配を緩くするために作られたコンクリートの堰）に順次魚道（ぎょどう）（落差を上げない魚を上らせるための階段状の通路）が設置され産卵域が上流に広がっていったこと】についてご紹介しました。サケが上流域ではなく、主に中流域で産卵することも先述の通りです。では、札幌市内を流れる豊平川において、実際にはどのような場所で産卵しているのでしょうか？図3の地図をご覧ください。

豊平川におけるサケの産卵場を示しています。札幌の街中が主な産卵場となっていますね。すすきの周辺やその下流の東橋など、皆さんが普段何気なく通っている場所でも、産卵しています。実はこんなに身近な魚なのです。



【図3】産卵場所の変遷

産卵場所がどのように変遷しているのかを見てみましょう。1993年と2004年、2015年のそれぞれの産卵状況を並べました。1993年までは床止工に魚道が整備されていなかったため、上流までサケは上れず、3号床止が上流端でした（※1993年参照）。その後、床止工1つ1つに魚道がつけられるようになり、現在ではさけ科学館の近く（南区真駒内）まで遡上し、産卵できるようになりました。

しかし、今の豊平川はいくつかの問題に直面しています。まず1つ目が、『河床低下』です。2004年と2015年の上流端の産卵域を比較すると、つい十数年前まで産卵していた場所にオレンジ色（産卵床が集まっているところ）が付いていないことが読み取れます。それはなぜか。川は本来、蛇行していて、時に氾濫や土砂崩れが起き、常にその形を変えながら流れてきました。それにより、河床に砂利も豊富だったのです。ところが、人口増加に伴って人間が住みよい環境へ整備されていくに従い、上流には砂防ダムができ、川は直線化されていきました。砂利が供給されにくく溜まりにくい環境になっていったのです。その影響は上流から現れ始め、今や産卵域の上流部分（さけ科学館の横周辺）は【図4】のようになっています。これではさすがのサケも産みにくいでしょう。



【図4】岩盤露出(さけ科学館横)

そして二つ目は、融雪時期の水質悪化です(※【図5】参照)。冬期、除雪された雪が河川敷の堆積場に集められます。その雪には、融雪剤やアスファルトの粉じんなど様々なものが含まれており、それが川に押し出されることは、水辺の生きものにとって好ましい水質環境とは言えない状況にあります。これらの事象が、降下するサケの稚魚たちにとってどのような影響を及ぼしているのか調査することも、今後必要になると考えています。

4. 最後に

札幌市民の生活にとって欠かせない豊平川。毎年同じように見えても、実は少しずつ環境は変わってきています。人間とサケを含む生きものたちが共存し、今後も豊平川の恩恵を享受し続けていくためにどのような形が好ましいのか、今一度考えるべき時期になったのかも知れません。

参考文献

有賀望・鈴木俊哉. 2009. 豊平川のサケ産卵床における環境条件と浮上までの生残率. SALMON 情報第 3 号 p. 3-5

有賀望, 森田健太郎, 鈴木俊哉, 佐藤信洋, 岡本康寿, 大熊一正. 大都市を流れる豊平川におけるサケ *Oncorhynchus keta* 野生個体群の存続可能性の評価. 日本水産学会誌 Vol. 80 (2014) No. 6 p. 946-955



【図5】春の豊平川河川敷(さけ科学館横)

会費の早期納入についてのお願いー

日頃から、当協議会の活動にご支援をいただきありがとうございます。本会の活動は、会員の皆様から寄せられる会費を唯一の財政基盤としております。これらの運営をスムーズに進めるためにも、会費を早めに納入いただけますよう、宜しくお願いいたします。

・27年度から年会費は、個人会員は2000円、家族会員は3500円になりました。・会費未納の方のみ振込用紙を同封しましたが、行き違いで納入された方はご容赦ください。封筒宛名タックシールに納入状況を記載しておりますのでご覧下さい。・会員台帳と出納簿でチェックしていますが、もし間違いがあれば至急事務局もしくは会計までご連絡をお願いします。・退会の申し出あるまでは会員です。本年度をもって退会される方は、28年度までの会費を納入の上、事務局または会計担当までご連絡下さい。

郵便振替口座 02710-1-8768 会費振込加入者名 北海道自然観察協議会会計
杉本 泰子

面白く楽しい自然ガイド

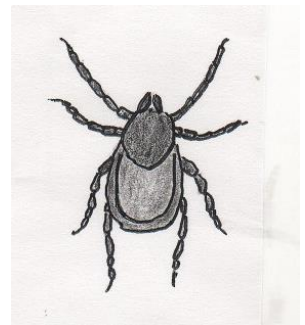
(6) 漢字名とマダニと

谷口 勇五郎

生物種の標準和名は片仮名の表記です。片仮名の羅列では意味が分からないことがあります。自然ガイドをしていると、生物名が色々出てきます。覚えるのが大変で、最近では忘れるものが多くなりました。対策として、意味のある漢字名と合わせて、覚えようと努力しています。オニタビラコ（キク科）は鬼田平子で、本州にタビラコ（キク科）があり、葉が田の面にロゼット状に平たく生育しているので、この名という。これは春の七草のホトケノザとのことです。タビラコに似て大型なので、オニを付けたのでしょう。ジョウカイボンというホタルのような甲虫がいます。強力な大顎を持ち平清盛のように強そうに見えるので、その法名の浄海坊から付けという説もあります。これらには自分として、大体納得します。

5月末、紋別岳の観察会で、ガイドをしていたとき、センダイムシクイのさえずる声が聞こえたので、いつものように、「チョチョと鳴くので、チョからセンダイ（千代）になり、千代虫食になったのですよ、仙台とは関係ないそうですよ」と説明したら、相棒のAさんが遠慮がちに、亜璃西社の「野鳥図鑑」を開いて、「仙台虫食」になっているという。「エッ」とびっくり、まさか。後でネットで調べると、仙台の方は少し回りくどい由来があり、その名も少なくありません。どうやら両者共、千代（千年）や仙台とは特別な関係がなく、鳴き声からくる当て字のようです、取り上げるのには、説明や納得のし易さも大事かと思えます。また別説のあることも踏まえておくべきでした。

中腹まで登り休憩後、「ダニが付いていないか、見て下さい」というと、1人が「ズボンのすねに1匹いる」と見せにきました。ルーペで見ると、背板が小さいので「メスだね」と言うと「オスも吸うかい」「ハア…」と返事すると、相棒のAさんは「確か、オスは吸わないそうだよ。ダニは一生に脱皮のため3回ほど吸うらしいよ。」「……」。脱皮だなんて、また、びっくり。勉強不足でした。野外活動上、人を吸血する動物か否かは大きい問題です。ダニについては付着する機会を避け、もし衣服や体に付いていれば、オス・メス関係なく振り払うこと。しっかり食い付いておれば病院へ、ということになります。しかも最近では、命に関わる感染症も懸念される虫ですから、スズメバチやカ並みの取り扱いが必要です。ネットで調べても様々な見解があり、判断に困ります。ダニの専門書は少ないのですが、アウトドア関係の危険な動物を扱った書籍：Bには、ヤマトマダニはオスもメスも吸血する。シュルツェマダニは成虫のメスが人を吸血するが、まれにオスも吸血する。同じく：Cではヤマトマダニはオス・メスともに人を吸血すると書いています。またダニのはなしという書籍：Dでは、「マダニ科（8属）は日本に44種おり、その内マダニ属は16種、それ以外の属には24種おります。ふ化後の幼虫（幼ダニ）は小型のげっ歯類（ネズミなど）に吸血し、脱皮し若虫になる。若虫は小・中型の哺乳類（ネズミやウサギ）に吸血し、脱皮し成虫になる。成虫は大型の哺乳類（ヒトも含む）に1週間吸血し、満腹すると地上に落ち、土にもぐり1ヶ月後に産卵、300~1,000個産み死ぬ。マダニは幼虫、若虫、成虫（マダニ属のオスを除く）ともに吸血する。満腹状態まで吸血しないと変態（脱皮）や産卵ができない」と書かれています。カ・アブ・ブユなどの双翅目では産卵の栄養のためメスのみが吸血します。マダニの場合は、成長（脱皮）と産卵のための栄養にしているようです。ヒトを刺す（吸血）マダニは16種おり、その内マダニ属には8種いるそうです。



マダニの♀

ヒトに最も取り付くのはヤマトマダニ、次がシュルツェマダニなそうですが、両者ともマダニ属ですので、オスは吸血しないこととなります。成虫でマダニ属以外のものは吸血することとなります。マダニオスの吸血性の有無は書籍により一致しない点もありますが、Dは、ダニの専門家17名による著書なので信頼性は極めて高いと判断しました。ガイドを1人で行っていると、つい、御山の大将になり、自己満足に陥り勉強不足を自覚しなくなることがあります。複数で行い、意見を率直に言ってもらえば、大変有難く大いに勉強になります。他人のガイドに同行することも同様に大変勉強になります。

初めて出会った生きもの

～ショウジョウトンボ セイヨウオオマルハナバチ アキノミチヤナギ～

蘭越町 大表 章二

住んでいる地域にどんな生きものが生息しているかを調べ始めて 10 年余りになります。その間多くの生きものと出会ってきました。その中で、記憶に強く残っているショウジョウトンボ、セイヨウオオマルハナバチ、アキノミチヤナギの 3 つの生きものとの出会いについて紹介したいと思います。

名駒の水辺の楽校でショウジョウトンボを見つけた (2009 年 7 月 31 日)

当時、蘭越町内に生息するいろいろな昆虫をさがしては写真を撮っていました。ショウジョウトンボを見つけたのはその頃の事でした。

トンボ類は種数があまり多くなく、類似種も限られているので、同定にあまり苦慮したことはないのですが、このトンボを見つけたときは別でした。

シオカラトンボぐらいの大きさの真っ赤なトンボが、池の中央付近に伸びている植物の茎にとまっていた。これまで蘭越では見たことのないトンボだったので、とにかく写真を撮ろうと思って静かに近づき、まず斜め上からシャッターを切りました。次に横からも撮ろうと思いましたが、泥の中の足がいうことを聞いてくれません。不穏な気配を感じたようで、トンボはあっという間に飛び立ち、視界から消えてしまいました。それでも一枚は撮れたので、それをもとに図鑑で調べてみました。その結果どうもショウジョウトンボのようだと思ったのですが、道南の一部を除き北海道には生息しないという



記述があり、確信が持てませんでした。そこで北海道トンボ研究会の横山透さんに同定を依頼したところ「間違いなくショウジョウトンボみです」という回答を得ました。また、このトンボは近年北上中で、最近では道南の各地で発見され、室蘭でも見つかったとのことでした。その後、鶴川や札幌でも確認されたようで、分布域はさらに拡大していると思われます。

自宅庭でセイヨウオオマルハナバチを見つけた (2014 年 7 月 21 日)

2 年前の夏のことです。7 月 21 日の午前中に自宅庭に出てみると、庭木のムラサキシキブにマルハナバチがやってきて花の周りを飛びながら吸蜜を繰り返していました。いつものエゾオオマルハナバチだろうと思いながらそばによって見ると、体が小ぶりで腹部末端が白くはありませんか。これは”エゾ”ではなく、”セイヨウ”だと思いました。実物は一度江別で見たことがあるだけですが、図鑑では何度も見ているので確信できました。そこでまず証拠写真を撮り、捕虫網で捕獲し、冷凍庫に入れて凍死させ、そしてまた証拠写真を撮影しました。かわいそうだがしかたがありません。

セイヨウオオマルハナバチは、トマトなどのハウス栽培に導入されたものが野外に逸出して定着し、生態系への悪影響が大きな問題となっています。そのため特定外来生物に指定されており、防除の対象になっています。これまで近隣のニセコ町や倶知安町、共和町では生息情報がありましたが、蘭越では見つかっていなかったもので、新たに生息範囲の拡大が確認されたこととなります。北海道の「セイヨウ情勢」というサイ



トで情報を収集していたので、写真と捕獲データを報告しました。

この日は1個体だけの確認でしたが、2日後の23日には4個体がムラサキシキブに群がっていました。

翌年の7月27日には、蘭越町内の港町で海岸植物のハマボウフウの花に来ていた1個体を発見しました。

港地区の海岸でアキノミチヤナギを見つけた (2016年8月31日)

これはごく最近のことです。9月発行の「自然観察NO.199」に書いたように、私は今年町内の港地区で、海岸植物の調査を行いました。その折に出会ったのがアキノミチヤナギです。調査終了間際の8月31日に見つけました。道が実施している保安林緊急改良事業実施地域の



そばの小さな道に生えていました。作業のための通路のようです。はじめ、ずいぶんと大きなミチヤナギだなと思いました。直立した茎は1mにも達しているように見えました。そのとき図鑑を携行していなかったため、家に戻って調べることにしました。大柄な草姿や海岸に生えることから、アキノミチヤナギという種類であることがわかりました。海岸に生えるので、ハマミチヤナギという別名もありました。これまでミチヤナギ属では、ミチヤナギとハイミチヤナギしか知らなかったため、ちょっと知識が増えたりうれしくなりました。

それにしてもこの道は、春から何度も通っていたにも関わらず見逃し続け、8月最後の日になってようやく見つけることができました。花はついていなくても、茎や葉は目に入ってもおかしくはないはずなのですが。

この周辺は外来植物が多く、イガオナモミ、イタチハギ、グンバイナズナ、ヨウシュチョウセンアサガオの4種は町内では港地区だけで確認しています。その他の外来植物も多数みられます。そんな中でこの在来の海岸植物の発見なので、なんだかうれしくなりました。

今後もしろんな生きものとのいろいろな出会いが待ち受けていると思います。機会があればまた報告させてください。

知られざる小河「オルイカ川」

千歳市 行徳 真一

北海道は、大規模開拓が始まってまだ百数十年ですので、日本国内では比較的原生自然が多く残されている地域なのですが、一部地域では開発による自然破壊が行われてきました。その様な情勢下でも今もなお一部に原生環境を残しているオルイカ川にスポットを当て、皆様にご紹介致します。

かつて千歳市東部に存在した馬追沼や長都沼は、丹頂鶴が生息し、葦などが繁茂する沼沢地でしたが、度重なる水害と食糧増産の機運により、戦時中の排水路掘削を初めとした干拓事業で、馬追沼は消失し長都沼は現在の形となりました。その干拓地は、今では東西に道東自動車道が貫通し、小麦・甜菜・馬鈴薯などが栽培される広大な畑作地帯に変容しています。かつて沼に注いでいた様々な小川は、用水路や排水

路に姿を変え現在に至っていますが、その中でも特筆すべき川が千歳川水系の「オルイカ川」です。

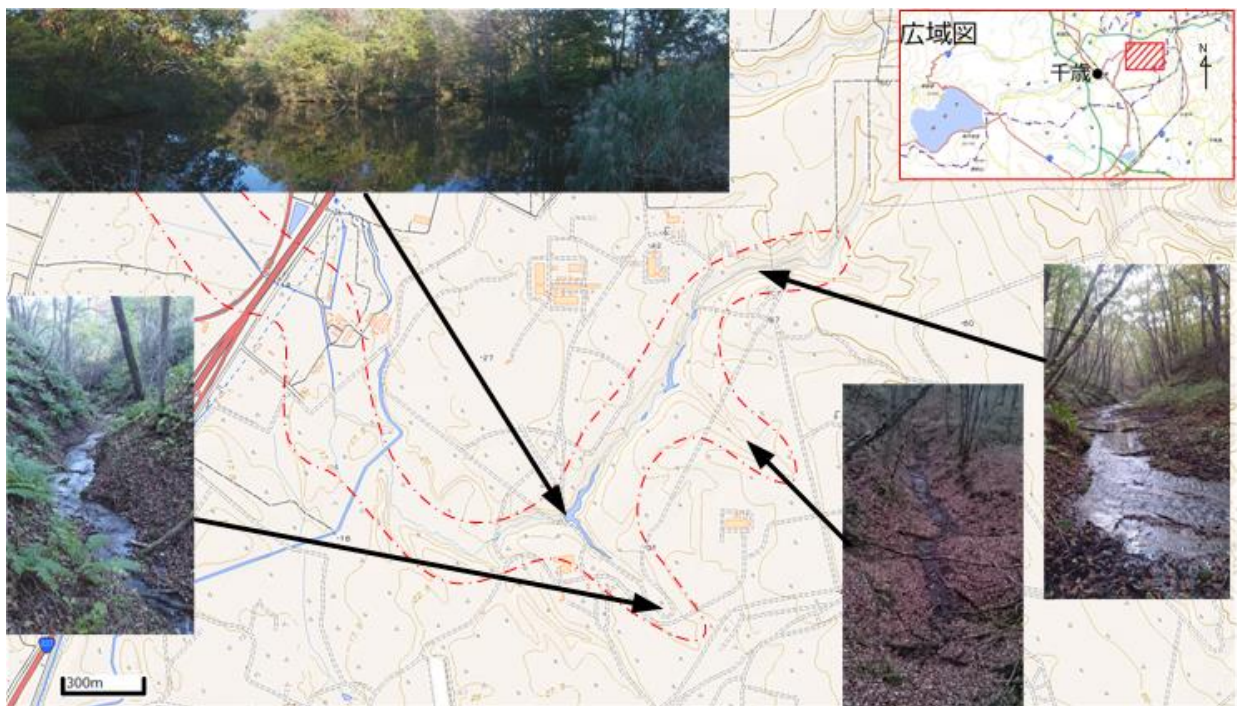
「オルイカ」とはアイヌ語で「o-ruika」、すなわち「川口・橋」という意味です。オルイカ川は、かつて存在した馬追沼から流れ出て長都沼と結んでいたイカベツ川に注ぐ川でしたが、イカベツ川は干拓事業で第十五号排水川に変貌し、オルイカ川も河川切り替え工事の影響で第十四号排水川に注ぎ込む様になりました。その様な変遷を経たオルイカ川ですが、その源流部は今もなお前人未踏の地であります。それもそのはず、源流部は防衛省が管理する演習場内に所在するため、関係者以外は「おいそれ」とは近づけません。

源流部で観察できる植物としては、ニリンソ

ウヤフッキソウ、オオバノエンレイソウ、ギョウジャニンニクなどが自生する地域もあり、さらには白いカタクリが観察できる地域があります。また鳥類は、ミヤマカケスやオオルリ、アカゲラなどが観察でき、アオバトやヤブサメなどの鳴き声が聞こえてきます。その他としては、かつて米軍が駐留していた時代、米兵がレジャーのためにブラントラウトを源流部の溜池に放流したと証言があるので、千歳川水系に生息するブラントラウトはオリイカ川に由来する可能性があります。

さらに旧オリイカ川右岸には、世界遺産登録候補「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一部、

縄文時代後期後半(紀元前1,200年頃)に造られた大規模な集団墓の「史跡・キウス周提墓群」、左岸には旧石器時代から縄文・続縄文そして擦文時代に至る規模の大きな遺跡である「丸子山遺跡」などの学術上貴重な遺跡が存在します。オリイカ1・2遺跡などからは近世アイヌの集落跡が発見されているため、源流部流域付近には未発見の遺跡が眠っている可能性があります。このような経済活動の及ばない場所の自然環境は、何人たりとも邪魔することなく、今もなお繁栄し続けていますので、これからも見守り続けて行きたいと思います。



オリイカ川源流部流域(破線内)とその様子。地図は国土地理院地図(電子国土WEB)を引用し筆者が加筆編集した。

ウォッチングレポート



札幌市北区「東屯田川遊水池と屯田防風林」2016/5/8

朝から日差しが強く、昨日の天候はうそのようで……前日とあいかわらず遊水池ではマガモ、コガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモを、草原ではアオジ、コムクドリ、ノゴマ、ノビタキなどを見ることができました。

また、発寒川にかかる橋からは、雪虫研究者(山田氏)より、生活指標のひとつでもある雪

虫の生活史について詳しく説明をうけました。

屯田防風林ではオオバナノエンレイソウが辺り一面を真っ白くうめつくしていました。アイヌ文化活動アドバイザー(檜木氏)より、アイヌの人たちにとっては、大切な食料のひとつであるオオウバユリなどについて、楽器(口琴)と金属製カニムクン(カラフトアイヌの楽

器)の演奏や、キハダ(シコロ)の実と、この池(遊水池)で採取したヒシ(菱)の実の団子を参加者で食べて、町中にとざされた自然とア

イヌ民族の文化にも少し触れることができました。

(池田政明)

苫小牧市「初夏のウトナイ湖」2016/6/4

天候が悪く参加者の少ない観察会でした。

観察できた植物・動物・昆虫

木本：エゾノコリンゴ・ズミ・チョウセンゴ
ミシ・ミヤマザクラ・ワタゲカマツ
カ・コマユミ・ツルウメモドキ・オニ
ツルウメモドキ・キャラボク・イチ
イ・ネグンドカエデ・カンボク・ミヤ
マガマズミ・コナラ・カラマツ・ハリ
ギリ・ヤマウルシ

草本：オオヤマフスマ・セントウソウ・ユキ
ザサ・ハルザキヤマガラシ・クサノオ
ウ・キジムシロ・ミツバツチグリ・ヒ
メヘビイチゴ・セイヨウタンポポ・エ
ゾタンポポ・ヒメスイバ・ナズナ・コ
ハコベ・ミヤマエンレイソウ・コウヤ
ワラビ・オオアマドコロ・カキドウ
シ・ムラサキケマン・ベニバナイチヤ
クソウ・ヒメイズイ・シロスミレ・シ
コタンキンポウゲ・ミヤコザサ・クサ

ソテツ・ヤマドリゼンマイ・ウラジロ
タデ・イトアオスゲ・ヒカゲスゲ・ト
ボシガラ・ハマハタザオ・カラハナソ
ウ・オニウシノケグサ・カワラスゲ・
マムシグサ・ヒレハリソウ・コウボ
ウ・オオイタドリ・スギナ・イヌスギ
ナ・ケナシハルガヤ・カモガヤ

鳥類：ウグイス・エゾセンニュウ・センダイ
ムシクイ・キジバト・ツツドリ・オオ
ジシギ・コヨシキリ・トビ・カッコウ・
クロツグミ

昆虫：ハンノキハムシ・ジョウカイボン・エ
ゾアカヤマアリ・シリアゲムシ・チョ
ッキリムシ sp・アワフキムシ sp・サ
ッポロマイマイ・ナラメリンゴフシ
(虫瘤)

(宮本健市)

札幌市清田区「平岡公園」2016/7/17

人工湿原の変わる様子を見よう

雨模様のなか出発。ツルアジサイ、シナノキ
が満開でいい香りです。

真紅のミヤマザクラの実、ホップのようなサ
ワシバの実、可愛いめしべの先を付けたコクワ。
人工湿地ではやっと咲き始めたエゾミソハギ、
ドクゼリ、ヒツジグサなど。

少し高いところにノハナショウブ、オカトラ
ノオ、クサレダマ、オオウバユリなど。キアゲ
ハの幼虫が見たいとの希望で、セリの水辺に見
つけました。

解散直後に小雨。ヤレヤレ！

(佐藤佑一)

札幌市清田区「平岡公園」2016/9/18

人工湿原の変わる様子を見よう

早朝から降ったり止んだり、小雨の中スター
トです。

実りから観察。赤い実はアキシバ、オオカメ
ノキ、ツチアケビ、ツリバナ、ズミ、マムシグ
サ…。黒い実はオオカメノキ、ウド、ハリギリ、
タラノキ、ナツハゼ…。青い実のサワフタギ。
灰褐色はサルナシ、ドングリ、キタコブシ。

花はミゾソバ、オオミゾハギ、ヤノネグサ、ヒツジグサ、トチカガミ、エゾトリカブト、ノコンギク、エゾヤマハギなど。気温 15°C 位、雨

の観察会でした。

ルリミノウシコロシのファンも年々増えてます。楽しい会でした。

(佐藤佑一)

小樽市 「中野植物園」 2016/10/2

草や木の実、菌類の観察

天気が大変よく、ミズナラのドングリが道一面に落ちていました。

風が吹くとパラパラと音がし、秋だなという感じですよ。

虫こぶ入りのマタタビ、サルナシ、トチの実などが多かったですが、暑いせいかキノコ類はほとんど出ていません。源山の北支事変での小樽の戦死者を祀る観音様を拝んできました。

(広岡賢治)

札幌市北区 「屯田防風林 秋」 2016/10/8

秋の紅葉と木の実

観察会中曇りだったが幸いにして雨降らず。屯田西公園の東屋で、紅葉や木の実の標本を見、アブラムシの説明を聞いた後、防風林に入る。約 5 町ほどの往復。折り返し点の「屯田開拓

の木（ハルニレの老木）」を見、約 2 時間の散策。担子菌（ホコリタケ）が見事に顔を出していたのは、今まで出会ったことのない初めての光景だった。12 時過ぎ、観察を終えた。

(澤田八郎)

札幌市豊平区 「精進川」 2016/10/9

扇状地の成り立ち

不安定な天候の中、扇状地の扇端側からスタート。マルバフジバカマが出迎えてくれ、崖の低さを観察しているとアカゲラの鳴き声だけが聞こえました。

さらに進み崖が高くなり、一万年前に古豊平川が形成した平岸面と札幌面の解説をしました。今年はシソ科の葉が多く見られたため、利き酒ならぬ利きハーブを行い、嗜好的な香り、不愉快な香り、もう嗅ぎたくない人などで楽し

みました。後半に入り、川の中ではホッチャレと卵を守るサクラマスを発見して歓声が上がりました。その後エゾノコリンゴ、アサダ、オオバヤナギを観察し、今度は平岸面から札幌面を見下ろしての観察。崖の上ではサワシバ、イワガラミ、ニオイヒバを観察しました。滝のところで精進川の名前の由来を解説して終了。今年のテーマでもある扇状地について地形、地質、地名について「学び親しむ」観察会となりました。

(鈴木ユカリ)

苫小牧市 「秋の錦大沼」 2016/10/9

秋の草花やキノコ

半年の役目を終えようとする木々の葉は枯れ気味です。これから本格的な紅葉シーズンが来ます。

今回の観察会では紅葉、黄葉、白葉の樹種やそのメカニズム、落葉のメカニズム、そして寒い冬の乗り越え方を中心に学習したり、観察を行いました。また秋はキノコのシーズンです。

キノコの名前は知らなくてもその形、色、生え方など、生物の不思議な世界を楽しみ、自然

の大切さを実感しました。

来年の再会と開催を約束して終わりました。
(白崎 均)

旭川市 「旭山」 2016/10/16

日に日に秋色に深まっており、山ではほとんどの花は終わり実をつけていました。今回は実と種子の観察からはじまりました。コクワの実を実際に、みんなで味わってみました。むかしはおやつ代わりでしたと参加者の方の感想。ホオノキやキタコブシの実を見つけ、これらは鳥に食べられることによって種子を散布する説明をいたしました。実は動物に食べられたり、動物に付着したり、または風によって運ばれたりして中にある種子を運んでもらって子孫を

残していく仕組みをみんなで考察できたのではないかと思います。ツリバナ、ツルシキミ、ツルマサキ、ヤドリギなど実も印象に残りました。後半は色づく紅葉の仕組みを学習しました。当日は好天に恵まれ、近くでは植樹会も行われていて多くの方々がこの旭山公園を楽しんでいたようでした。

(笠間・嶋津)



参加者の声



江別市「野幌森林公園」(2016/5/19)

野幌原始林春の森林の中で

大鎌 有紗・江口 美礼・片岸 幸太郎

新札幌駅に早朝集合、JRバスに乗り換え文京大南町下車、10分歩いて野幌原始林大沢口に到着しました。この日の観察会には、年配の方々が10数名ほどと小学生を連れた親子それに私達清田高校理科部が参加しました。

広い野幌原始林ですが、この日の観察コースはエゾユズリハコースと大沢コースに見られる春の植物が中心でした。講師の横山先生、三澤先生、顧問の大宮先生、春日先生に森の視点を聞きながら写真を撮ったり、落ちている物を手にとって観察しました。

特に印象に残った植物がいくつかあります。ヘビイチゴは、小さい黄色の花を咲かせていました。イチゴという名前がついているのに、食べられないと知ってちょっと残念な気がしました。茎から葉が同心円状に出ている植物はクルマバソウと言う名前でした。自転車のタイヤで言うとスポークのところが葉っぱということです。ところがオククルマムグラというクルマバソウととても似ている植物がありました。

特徴的な違いは茎がサラサラしているかザラザラしているかです。3枚の葉っぱの褐色の花のエンレイソウと白い花のオオバナノエンレイソウは北大の校章にもなっているとのこと。ミズヒキはお祝い事などの封筒についている水引に似ているため、この名前が付いたそうです。サイハイランは采配をふるうという言葉の語源になったもの。昔、戦場で大将が武士たちを指揮するために振った道具、采配に似ているからだそうです。

森の中を流れる小さな沢で小石をめくると白やうすい褐色のくねくねした小さな生きものがついていました。再生の実験に使われるプラナリアです。また、丸まった葉っぱがたくさん落ちていたところがありました。これをオトシブミというそうです。葉の中に幼虫がいると知ってとても驚きました。オトシブミという甲虫は葉を円筒形に丸めてその中に1個の卵を産むのです。上をみると木についている葉も円筒形に丸まっているものがたくさんありました。

森林浴は気持ちよく体に良いと感じましたし、もっと植物や森林のことを調べてみたいと思いました。
(清田高校1年)



クルマバソウ



食べられないイチゴ、ヘビイチゴ



オトシブミ



サイハイラン

小樽市「蘭島海岸の海浜植物と海産動物、海底火山噴火跡」(2016/7/3)

小樽市 関川 けい子

「蘭島海岸の海浜植物と海産動物、海底火山の噴火の跡～蘭島海岸から忍路峠を経て忍路湾へ～」の自然観察会に参加しました。とても楽しい一日でした。海岸を歩くのも久しぶりで気持ちよく、海岸の植物も色々と教えて頂きました。海岸にも外来種が増えているのですね。

忍路峠（観音峠）の道は初めてで、新発見でした。忍路の枕状溶岩がコンクリートで固められてしまったのは非常に残念だったと思います。指導員の方の熱い思いが伝わりました。

とても楽しかったので、又機会があれば参加したいと思います。ありがとうございました。

千歳市「紋別岳」(2016/9/3)

千歳市 小林 政文

紋別岳、山頂からの眺めが良いということで、それも楽しみに参加した。観察会当日の朝、天気予報は曇り後晴れ、山頂で視界が開けることを願い家を出た。集合場所では小雨にも係らず13名が参加し、観察会が始まった。出発すぐか

らガイドさんが小さい頃の思い出も交え、草木の説明をしてくれ、楽しく名前を知ることができた。この時期、花も終わり紅葉もこれからなので、あまり見るものはないと思っていたが、咲いている花から落葉、部分落葉、きのこなど

あり、山の息吹を感じ取ることができた。過半数が観察会初めて参加とのことだったが、熱心に草花の説明のメモを取る人もいて、参加者全員得るものが沢山あったようだ。山頂は、霧と強風で何も見えず残念だったが、



【観察部からのお願い】

観察部では、全道各地の皆さんから来年度の観察会企画を広く募集します。今年度観察会予定表に準じ、「月日」・「観察地」・「テーマ」・「集合場所・時刻」・「交通機関」・「連絡先」等の各項目を記載し下記宛て郵送、またはメールにてお送りください。

なお、保険適用（観察会集合場所から解散場所まで）の関係上、参加者を観察会開催地まで指導員の車に同乗させることは、原則として認めておりませんので企画立案の際にはご留意願います。募集期間は、1月15日までとし、観察部会にて日程調整などの検討を加えた上で、来年2月の理事会に提出する予定です。追加および訂正は、1月末まで受付します。

観察部 山形誠一 〒064-0946 札幌市中央区双子山1丁目12-14

Mail seiichi.y@jcom.home.ne.jp

【指導員講習会開催予告案内】

公益財団法人日本自然保護協会と北海道自然観察協議会の共催による『2017年度NACS-J自然観察指導員講習会』を2017年9月30日(土)～10月1日(日)にかけて、「帯広の森はぐくむ」で開催する予定です。開催が決定し、詳細がわかり次第、お知らせいたします。

【連絡先】

北海道自然観察協議会のホームページ <http://www.noc-hokkaido.org/>

会費や寄付は 郵便振替口座 02710-1-8768

会計 杉本 泰子 063-0062 札幌市西区西町南2丁目5-5

会費振込加入者名 北海道自然観察協議会 杉本 泰子

Tel/Fax 011-664-9263 E-mail akibare-sawayaka@ma4.seikyoku.ne.jp

観察会保険料は 郵便振替口座 02770-9-34461

観察会担当会計 小川 祐美 047-0155 小樽市望洋台3-13-5

Tel/Fax 0134-51-5216 E-mail streamy@estate.ocn.ne.jp

観察会報告書・資料は 観察部 山形 誠一 064-0946 札幌市中央区双子山1丁目12-14

Tel/Fax 011-551-5481 E-mail seiichi.y@jcom.home.ne.jp

退会、住所変更の連絡は 事務局 池田 政明 001-0045 札幌市北区麻生町4丁目9-16

Tel/Fax 011-708-6313 E-mail ecology@cocoa.ocn.ne.jp

事故発生等緊急時はアスカ・リスクマネジメント 担当 本間氏 Tel 011-873-2655

投稿や原稿は 編集部 村元 健治 006-0552 札幌市手稲区星置2-8-7-30

Tel 011-694-5907 E-mail cin55400@rio.odn.ne.jp

表紙写真 森 繁寿



自然観察 2016年12月15日 / 第120号 年4回発行
(会員の『自然観察』購読料と郵送料は会費に含まれています。)

発行 北海道自然観察協議会
編集 北海道自然観察協議会編集部